

戦時体制下の文学者

——ペン部隊を中心に——

都 築 久 義

はじめに

平野謙は著名な筑摩版の『昭和文学史』のなかで、「いわば『政治と文学』の露骨な直結がペン部隊の結成という形態において一種の強制力をもったこと、これはその後のさまざまな文学団体の結成や文学者の社会的行動に大きな変化と規制を与えた最初のあらわれだった」と、昭和十三年九月の内閣情報部派遣のいわゆるペン部隊を位置づけている。晩年の『昭和文学私論』（昭52・3 毎日新聞社）においても、「ペン部隊のこと」なる項目を設け、尾崎士郎の「ある従軍部隊」に言及して、「ペン部隊の痛し痒しのデイレンマを尾崎士郎はさまざまな制約のもとに、精一杯描いているのである。」と語っている。

そこで、尾崎士郎研究の一環であると同時に戦時体制下の文学と文学者の動向を考察するうえでも看過しえない「ペン部隊」について、その結成の経緯やそれが投じた波紋を探ってみたいと思う。

文学者の従軍

昭和十二年七月七日、北平（北京）郊外の蘆溝橋の銃声で始まった日中両国の軍事衝突は、いったん停戦協定が結ばれたが、政府は陸軍内部の事件拡大派に押し切られた形で、現地で協定が締結された同じ七月十一日に、華北の治安維持を名目として派兵の声明を出し、中国への進出に本腰を入れ始めた。

一方中国側も、前年暮の西安事件でいわゆる国共合作がなり、排日・抗日運動の高まりを見せ、七月十七日には国民政府の蒋介石は蘆山で周恩来と会談し、対日戦争準備の談話を発表し、事実上停戦協定は履行されなかった。

七月二十五日、北平と天津の間にある郎坊駅附近で、翌二十六日には北平の广安門で日本軍は中国軍に攻撃を受け、二十八日に通州で日本軍と日本人居留者百余人が中国側に虐殺（通州事件）された。こうした事態にたいして、日本軍も総攻撃を開始。その月のうちに北平・天津を制圧した。

中国側の抗日の火ぶたは華北であがっただけではない。八月九日、上海海軍特別陸戦隊の大山勇夫中尉が巡視を終え本部に連絡に行く途中、中国側に射殺されるという事件（大山事件）が起きて緊迫を生み、十三日、閣議は陸軍の上海派遣を決定。ここでも激突が始まった。

八月十五日、日本政府は南京政府に対して断固たる処置をとる旨の「帝国政府声明」を発表。中国側もまた、この日蒋介石が総動員令を出し、ここに日本と中国は全面戦争に突入したのである。当初、「北支事変」と呼ばれたこの戦争も、「支那事変」と改称（九月二日）され、文字どおり「支那」全土で戦闘が展開されるに至った。

こうして中国に激しく軍事的攻勢をかけた政府が、先述の七月十一日の華北出兵声明と同時に、国民に対しても挙国一致の協力を要請し、国内の軍事体制の強化に努めたことはいうまでもない。閣議は、八月二十四日に国民精

神勳動員実施要綱を決定し、九月九日訓令を発した。九月二十五日には情報委員会を内閣情報部に昇格し、十一月十八日に戦時大本営令を改めて、新たに大本営令を公示。陸海軍の一体化をはかり、宮中に大本営を設置するなど、政府・軍部の指導体制も一新して本格化していった。

その一環として、やはり七月十一日の華北出兵声明当日、近衛首相はまず新聞通信各社代表と懇談して協力を求め、十三日には中央公論社、改造社、日本評論社、文芸春秋社の代表を招き、雑誌社にも協力を要請していたのである。

そして、おそらくそれに応えるべく、雑誌社が文学者の現地派遣を計画している矢先、『東京日日新聞』は八月三日の新聞に、「本社事変報道陣に異彩（横組み白抜き）、大衆文壇の巨匠／吉川英治氏特派／昨夕飛行機で天津到着」の五段抜きの社告を出して、人びとを驚かせた。八月五日には、はやくも彼の「天津にて」の第一報が紙面を飾った。吉川は二十四日に帰国したが、同紙は続いて木村毅を上海に特派した。彼は海路で二十一日に上海に着き、二十四日に第一報を載せ、九月五日に帰った。

雑誌の方で先陣を切ったのは吉屋信子である。彼女は「主婦之友皇軍慰問特派員」として、八月二十五日、天津に向けて羽田を飛びたった。九月三日に帰京すると、二十二日にまた、長崎から上海へ行った。彼女は、『主婦之友』十月号に「戦禍の北支現地を行く」、十一月号に「戦火の上海決死行」を書いている。

『中央公論』から特派された林房雄は、八月二十九日に上海入りし、尾崎士郎は八月三十一日、佐藤観次郎と一緒に東京駅を出発して華北へ向かった。『日本評論』からは榊原潤が上海に九月初めに赴いている。かくして十月号『中央公論』には、「現地ルポルターージュ」と付されて、尾崎士郎の「悲風千里」と林房雄の「上海戦線」が、『日本評論』に榊原潤の「砲火の上海を行く」が載った。

彼らは三週間ほどで帰ってきたが、入れ替りに十月になると、十一日に『文芸春秋』から岸田国土が華北へ、十九日に『改造』から三好達治が上海へ特派されて出発した。岸田は十一月初旬に、三好は下旬に帰国して、それぞれ『文芸春秋』に「北支日本色」（昭12・12——13・2）を、『改造』に「上海雑感」（昭12・11——13・1）を寄稿した。時を同じくして、杉山平助、高田保、大宅壮一らが行き、暮には陥落後の南京へ林芙美子や石川達三が出かけた。筆禍事件を起こした石川の「生きてゐる兵隊」（『中央公論』昭13・3）は、この従軍後に書かれた。また、金子光晴も夫婦で何度目かの中国行きに旅立った。金子の紀行文「没法子——天津にて」（『中央公論』昭13・2）は、異色のレポートとして名高い。

年が明けて二月には詩人の草野心平が、三月下旬には小林秀雄が大陸へ渡った。周知のように小林は、出征中の火野葦平に芥川賞を授与するために、『文芸春秋』から派遣されてわざわざ杭州の陣中に足を運んだのである。彼は約一カ月間中国に滞在し、杭州、南京、蘇州をまわって四月下旬に帰り、『文芸春秋』に「杭州」（昭13・5）、「蘇州」（同・6）などの筆を執った。小林の帰国に前後して、浅原六郎、豊田三郎、芹沢光治良らが行き、保田与重郎と佐藤春夫が続いた。保田は結成までもない「新日本文化の会」から、佐藤は『文芸春秋』からの特派員として行った。

いずれにしても、「支那事変」の開戦後わずか一年の間に、かくも大勢の文学者が中国に渡り、戦跡をまわり戦場の砲弾のなかをくぐってきたのである。そして彼らの従軍記や現地報告が毎号の雑誌を埋めていたとすれば、いやがおうでも人びとの関心は「支那事変」と「支那」に惹きつけられたのは当然であろう。

もとより文壇でもこれらの従軍報告やルポルターージュは話題になり議論をよんだが、それは報告文学のあり方やルポルターージュの本質といった側面からのものであった。戦争批判はむろんのこと、文学者が従軍することの是非

などは論議の対象にならなかったのである。「支那事変」開戦の直前の四月、政府は言論取締強化の方針を発表し、直後の十二月、いわゆる「人民戦線事件」で自由主義者も獄につないで発言を封じたが、「事変」の進展と「皇軍」の相次ぐ勝利のなかで大多数の国民は興奮し、ナショナリズムを昂揚させた。むろん、多くの知識人・文学者も例外ではなかった。

伊豆利彦は「戦争文学と作家の従軍」(『国文学』昭39・10)で、

この時期の従軍ルポルタージュは、林房雄の「上海戦線」(『中央公論』昭一二・一〇)にしても、尾崎士郎にしても、作家の戦争に対する主観的感慨や、信念や決意の生のままの表白が目立ち、それが作品を支配している。このような主観的傾向は、現地滞在の期間が短かったという外的な理由によるよりも、作家が戦争に昂奮して、現実をリアリスティックに把握する作家としての主体を喪失もしくは放棄したことから生まれたのである。

と書いているが、彼らが「信念や決意を生のまま表白」し、「主体を喪失もしくは放棄」したのではなく、まさに主体的に戦争に埋没していったのはなぜか、なにが彼等をして主体的にそうさせたのか、そこに戦時下の文学と文学者を考察する際の重要な課題があるのではないか。

ペン部隊の人選

昭和十三年八月二十四日の各新聞は、内閣情報部が漢口攻略戦に作家を派遣する、と大きく報道した。

聖戦一年を迎えていま全日本の関心は漢口総攻撃の一点に集中されてゐる時、銃後の国民思想と重要な関係を背負つて立つ現文壇の一流人を網羅して来る漢口攻略戦に従軍せしめ、現実把握の機会をつかませやうと、計画が内閣情報部内に進められてゐたが、廿三日情報部が知名の文壇人を招待、午後三時から約二時間に亘つて懇談の結果、ここに未曾有の文壇人の戦線総動員が実現することに決定した。

（『都新聞』）

内閣情報部が直接文学者を従軍させようとした経緯と事情は、いまひとつ定かではないが、すでに民間のマスコミが派遣した文学者の現地報告が必ずしも不評でなかったことや、おりから実戦者火野葦平の「麦と兵隊」〔改造〕昭13・8）が爆発的な人気を似て迎えられたこと——板垣直子に従えば、「戦争文学に対するかかる社会的反応と火野の第一作が大きな成功をとげたことは、当局に新らしく作家達に従軍させる計画を思ひ立たせた。」〔現代日本の戦争文学〕昭16・5 六興商会出版部）のであらう。さらに、自身もペン部隊の一員であつた杉山平助が「漢口戦を終へて」〔東京朝日新聞〕昭13・11・8——11）で紹介している「私も文学者が、漢口へ従軍することを、政府が大々的に援助したのは、実は天下の全耳目を漢口に集中せしめんがための一段として、私どもは、チンドン屋的役割を負はせられたといふやうな、うがつた説をなす人すらあつたが、当否はとにかく、面白い見解たるに相違ない。」との、まさに「うがつた説」もあながち見当外れでもあるまい。

いずれにしても、内閣情報部の思惑は見事に適中し、「天下の全耳目を漢口に集中」させることに成功した。文学者の本性や知識人のプライドが、こうした政府、とりわけ軍部の計画には反発や批判を招いたり、あるいは危険なために尻込みされるのではないか、との懸念は全くの杞憂だった。再び板垣直子の言を借用すれば、文壇人にと

って「当時、ペン部隊などに作家が加わることは、彼の文学者としての生涯に洋々たる未来を約束する如くみえた」こともあって、大方の文学者たちはむしろ従軍を希望したのである。

この計画の実行に際し文壇側の責任者であり、人選の中心となった菊池寛は、例の「話の屑籠」(『文芸春秋』昭和13・10)で、次のように語っている。

文芸家協会長たる自分に話があつたとき、その人数は四五人だつたと思つた。激戦の中心たる漢口方面へ行くのだから、希望者が少いのではないかと心配し、自分の懇意の人達を説得して行つて貰ふつもりで、頼み易いやうな人丈に情報部へ集つて貰つた。ところが十一、二人集つた連中の殆んど凡てが行くと云ふのである。自分なども、最初は行くつもりではなかつたが、情報部の話を聴いてゐる内に、之は何うしても行かねばならぬと思ひ、従軍を決心したのである。人数も二十人位までいと云ふのである。しかも、明日までに定めてくれと云ふのであつた。短兵急であるから、一人一人交渉するわけに行かないし、二十四五人も交渉すれば、半分は行つてくれるだらうと思ひ速達を出した。すると二、三人を除き、皆行くと云ふのであつた。交渉した人全部に行つて貰へなかつたのは、そのためである。とにかく話があつてから中一日置いて、人選が定まつたわけで、人選についても疎漏があつたが、止むを得ないと思つてゐる。

菊池寛が速達を出した文学者の数は、『文芸年鑑』(昭和十四年版)には三十余氏とあり、一部の新聞報道には五十氏とあって判然とはしないけれども、従軍希望者が殺到したことはまちがいない。ペン部隊に参加することが、「彼の文学者としての生涯に洋々たる未来を約束する如くみえた」とすれば、いまだその文壇的地位が確保しない

中堅や新人が、人選に注目し、人選をめぐってさまざまな思いをめぐらしたとしても不思議ではなからう。

八月二十六日午後、仰々しくも情報部派遣作家の氏名は首相官邸で発表された。選ばれたのは、吉川英治、岸田国士、滝井孝作、深田久弥、北村小松、杉山平助、林芙美子、久米正雄、白井喬二、浅野晃、小島政二郎、佐藤惣之助、尾崎士郎、浜本浩、佐藤春夫、川口松太郎、丹羽文雄、吉屋信子、片岡鉄兵、中谷孝雄、菊池寛、富沢有為男の二十三名である。

人選の発表から二週間余、情報部の思惑どおり事は運び、新聞は連日従軍作家の動向や従軍作家の感想・抱負を載せて、この計画を「壮挙」とはやしたてた。従軍作家に選ばれた者は、すっかりマスコミの寵児となり、一躍花形作家の処遇を受けた。そうなればおもしろくないのは、初めから声のかからない作家や選に漏れた者である。計画が新聞に出た直後に早くも、「文士の大名旅行——須く第一線に立て」(『都新聞』昭13・8・25)の「狙撃兵」なる匿名欄からの矢が放たれ、尾崎士郎がこれにたいして翌日の同紙「大波小波」欄で「僕はこの思はせぶりな、その癖小人的な発想と嫉妬感と半ばな皮肉だけで成立してゐるやうな文章が今日のやうな時代に存在してゐることを悲しむ。」と応酬する一幕もあり、河上徹太郎は『東京朝日新聞』の「槍騎兵」欄(昭13・9・2)で「要は、代議士の視察旅行に類した精神的大名旅行をしないことだ」と忠告した。

そうかと思えば、広津和郎の「残念無念」の正直な声も「大波小波」欄(昭13・8・29)に載っている。

▼漢口攻略戦に従軍する希望があるかといふ問合せを受けた時、私は夢かと思ひ、喜びに胸が躍った。全く思ひがけない幸運だったからである。——それで早速それを希望する旨返事を出した。

▼ところが、銚衡の結果、発表された顔触れを見ると、その中に私の名前は這入つてゐない。糖喜びだつたわ

けである。喜ばされただけそれだけその失望は大きい。

▼私は今日やはり問合せを受けた宇野浩二から、『僕は行きたいといふ希望を答へて置いたが、君も是非行け』といふ手紙を受取つた。自分も希望の答を出して置いたといふ返事をしようと思つてゐるところに、都のK君から電話がかかつて来た。そして顔触れの決定の発表がありました。あなたの名はその中にありませんよと知らせて呉れた。『宇野は?』と訊くと、『宇野さんの名前ありません』といふ。宇野もさぞ残念がつてゐる事と思ふ。

▼どういふ標準で銓衡されたかは知らない。併し希望者が多くて人員に限りがあるとすれば、幸運に洩れる人間が出来るのは止むを得まい。——不幸にして宇野も私も洩れたわけである。併し希望を持たされただけ、残念無念は相当なものである。今後毎日漢口総攻撃の記事を読むにつけ、腕を扼して『残念無念』をくり返さなければならぬかと考へると、一寸持つて行きどころのない気持になる。

▼併し仕方のない事は仕方がない。選ばれた幸運の羨しい連中よ、少々癩ではあるが、しつかりやつて来て呉れと、負惜みを云ふより仕方がない。——かういふ中にも残念になるがどうも仕方があるまい。

「大名旅行」という非難、忠告、人選の詮策、残念無念の泣きごとから「新潮評論」(『新潮』昭13・10)の「豊かなころ、寛容な見方に立つて、本来どうでもいい人選の如き事については、批評がましいことをしないのが文学者の態度だ」と説く声まで、文壇でかまびすしい論議が交され、一騒ぎあったことは事実だ。『日本評論』(昭13・10)の「匿名時評」——「従軍部隊の出陣」はこれをまとめて、次のように言っている。

従軍部隊の陸軍班は、十一日午後三時、東京発富士で、軍装姿も勇ましく颯爽と、現地へ向けて出発した。海軍班は十四日羽田出発。全文壇をゆるがした。——いや文壇だけでなく、ジャーナリズム全体を揺り動かした載筆参戦の画期的壮挙も、これで勇ましく一步を踏み出した訳である。と同時に、従軍作家の人選をめぐつて乱れ飛んだいろいろのデマ、揣摩臆測もこれで一先まず静まる訳である。何しろうるさい文壇、さがないジャーナリズムのことだから、一時は蜂の巣をつついたやうな騒ぎであつた。……………

人選が発表された時、これは菊池寛、佐藤春夫、久米正雄のお手盛だといふ評判がたつた。内閣情報部の計画そのものに対して何人も双手を挙げて賛成し、喝采し、感謝した。だが発表された顔触れに就いては、文壇やジャーナリズムではかなりの不満を表明した。菊池、佐藤、久米のお手盛だといふのは、顔触れに余りにもはつきり出てゐた。露骨すぎるほどだ。たとへば意外な人と思はれるやうなものには、背後にそれぞれ菊池、佐藤、久米の顔が覗かれる。

匿名子があげる「意外な人」は、富沢有為男、中谷孝雄、滝井孝作、深田久弥。富沢と中谷は佐藤春夫の、滝井は菊池の、深田は久米正雄の「依怙最眞」だという。「依怙最眞」といえば、菊池寛が文芸春秋社の社長であり、久米が『東京日日新聞』の学芸部長であつたことから、「今度の壮挙を文芸春秋社が壟断した形だと、嫉妬もまじつて、むくれ出した。」り、「新聞ジャーナリズムの方も神経を立てた。ペン部隊の顔触れは、東日、文春に取つて有利な人々を選んできると、むくれた。」とのことである。

匿名時評子は続けて、

通俗作家、大衆作家の比較的多いことが、議論を生んでゐる。通俗大衆作家をそんなに入れるかはりに、評論家、詩人をもう少し加える可きであつたといふ、ひとつは穩かな意見。もうひとつは激しい意見で、そもそも通俗大衆作家のごときは戦場に送つても、文化的に何の意義もないといふのだ。

とも書いている。

二十二名のなかで、当時、通俗大衆作家と目されていたのは、菊池寛、久米正雄の両御大をはじめ、吉川英治、北村小松、白井喬二、小島政二郎、浜本浩、川口松太郎、吉屋信子、片岡鉄兵と十人を数え、たしかに多い。それに比べ評論家は杉山平助と浅野晃の二人、詩人にいたっては佐藤惣之助一人。それも佐藤は詩人としてより流行歌の作詞家としての方が有名だった。

詩人がペン部隊のなかに一人しか入っていないことを、北原白秋は『東京朝日新聞』の「槍騎兵」欄（昭13・9・5）で、

本来詩歌は文学の精髓であり、詩人は新時代の先駆を為すべきである。殊に記紀万葉以来伝統の精神に立つ日本
本の詩歌がたつた一人しかこの壮挙に加へられないといふことは国民総動員の現在由由しい問題である。せめて詩、短歌、俳句を通じて十人位は第一線に派遣されてもいい筈である。

と悲憤慷慨している。が、同じ欄（昭13・9・3）で、萩原朔太郎は、

菊池寛氏から連達が来て、漢口行予定の人員外に、詩人を一二名入れることになつたから、至急諾否の返事をせよといふことだつた。意外の事で僕は大いに悦んだが、持病の療養中で健康の事が気になつたので返事を一日遅らせたお蔭で人選からオミットされた。しかし佐藤惣之助君が僕に代つて詩人側の総代に選ばれたので、まづ僕等の面目も立つたといふわけである。

と発言しているのが興味深い。

一方、漢口従軍派遣の人選で多すぎると批判され、「戦場に送つても、文化的には何の意義もない」とまで酷評された大衆作家たちは、漢口従軍の一行が帰国すると、ペン部隊第二陣として海軍から「南支」へ派遣された。十一月四日に、長谷川伸、土師清二、中村武羅夫、甲賀三郎、添邦三、野村愛正、小山寛二、関口次郎らが東京を発ち、十二日には菊田一夫、北条秀司らが同地へ出かけた。第二陣の主だった連中は、甲州の山に登って合宿までして従軍に備えるという意気込みだった。

ペン部隊の行動

昭和十三年六月十五日、大本営は御前会議で武漢作戦・広東作戦の実施を決定し、十八日作戦準備を下命した。それから二カ月後の八月二十二日、

一、中支那派遣軍ハ海軍ト協同シ、漢口付近ノ要地ヲ攻略・占拠スベシ。此ノ間デ、成ルベク多クノ敵ヲ撃破スルニ努ムベシ。

二、北支那方面軍ハ、中支那派遣軍ノ作戰ニ漢口付近攻略後ノ占拠地域ハ、勉メテ之ヲ緊縮スベシ。

策応ヲシテ敵ヲ牽制スルニ努ムベシ。

(黒羽清隆『日中15年戦争』教育社、以下同著参照)

という命令を「中支那派遣軍司令官」と「北支那方面軍司令官」に発した。

周知のように、日本軍はそれより半年以上もまえの十二月十三日、国民政府の首都・南京占領に成功し、国内では南京陥落を祝う提灯行列が行われた。が、実は日本軍が入城するまえに、国民政府の首脳部は南京をひきあげ漢口に移っていたのである。そこで政府は年が明けて一月十六日、有名な「帝國政府は爾後國民政府を對手とせず帝國と真に提携するに足る新興支那政權の成立發展を期待し、是と兩國國交を調整して更生新支那の建設に協力せんとす……」の「帝國政府声明」を發表し、「帝國と真に提携するに足る新興支那政權」の樹立を画策したもののさしたる成果は得られなかった。そのため、現地軍や參謀本部内の強行派勢力が台頭し、残されている敵の主要地であり抗戰の根拠地である徐州、漢口、広東の攻略作戰が展開されるに至ったのである。

まず四月七日、大本營は徐州作戰を命令。一カ月余で徐州占領(五月十九日)を果した。そしていよいよ國民政府の實質的な首都・漢口の攻撃である。漢口攻略戰こそ「支那事變」のヤマであり、文字どおり皇國の興廢がこの一戦にかかっていたから、「支那事變」では最大規模といわれる総兵力約三十万人が投入された。にもかかわらず、八月末の総攻撃開始から十月二十七日の漢口(武漢三鎮)占領までに二カ月も要した。とすれば、近代的兵力の優位を誇っていた日本軍が苦戦し、激戦だったことは誰にも容易に推察できた。それだけに、軍部も國民もこのほかこの勝利を喜び、戦争の終結の日の近いことを予想し期待した。

ところが、国民政府軍事委員会委員長、蔣介石は、日本軍の漢口入城の前日に脱出し、さらに奥地の重慶に逃亡したまま屈服しなかったのである。年内解決の期待は外れ、またもや南京占領の二の舞となった。

さて、漢口従軍のペン部隊はこうした戦局のなかで、先述のように漢口作戦が発令された翌日情報部と懇談会を持ち、人選が行われたのである。

選ばれた二十二名の者は陸軍班と海軍班に分れ、現地では別々の行動をした。海軍班に所属したのは、菊池寛、吉川英治、佐藤春夫、浜本浩、小島政二郎、北村小松、吉屋信子、杉山平助の八名である。東京出發は陸軍班の方が一足早く、九月十一日、そろって明治神宮に参拝し、午後三時、派手な見送りのなか急行「富士」で西下し、福岡に向かった。福岡から上海に飛びたつに際してさらに二班に分れ、十三日、久米正雄、浅野晃、川口松太郎、片岡鉄兵、佐藤惣之助、深田久弥、林芙美子が先発。後班は十五日に後を追った。海軍班は七日に単独で出發した杉山平助を除く七人が、十四日に羽田から発った。

上海に到着した一行は、九月十六日陸・海両班一緒に陸戦隊本部を訪ね、翌日は「維新政府」を訪問した。海軍班は十八日にはやくも南京に向かい、南京からは揚子江を上って九江に至り、九月二十七日から十月五日まで、二人一組で軍艦に乗り込んで前線に出た。この間に田家鎮攻略戦（九月二十九日占領）が展開され、彼らはそれを眼のあたりにして、漢口陥落まで残留を希望した杉山平助を残し、十月十一日未明、一行七人は神戸に帰着した。

菊池寛は「話の屑籠」（『文芸春秋』昭13・11）のなかで、

無事に帰つて来た。我々は、海軍で作つてくれたプログラム通り、行動したのである。最前線に行動する軍艦に十日近く乗つてゐたことは、我々にとつて貴重な経験であつた。毎日、前方で二、三十の機雷が発見され爆

破された。が、それよりも我々の乗つてゐる軍艦の傍を、いつの間にか流れ過ぎた浮遊機雷が、下流の方で処分される爆音が時々、聞こえるのが氣持が悪かつた。

と語っている。

また、佐藤春夫は早く帰ってしまったことに対する世間の眼を気にしてか、「わが従軍記」(『日本評論』昭13・11)で、

九月十四日、約一カ月の予定で出発した我等は十月十一日午後五時二十五分帰京した。予定の如く約一カ月である。戦地ではすべて司令官の命令の通りに行動した。これも予め決定された如く約十日間であつた。九月二十七日前衛の艦艇に配属されて十月五日退艦を命ぜられた。十日間でなく九日間であつたのも我々の都合ではなく司令官の意志を奉じたまでである。一般に漢口入城まで滞在するやうに思ひ込んでゐたせゐるか我等が思ひの外早く帰つたと或は不満に或は満足に思つた向もあるらしいが、それは人様御勝手の推測で一切我等の関知しないところである。杉山平助氏が一人居残つて漢口にまで行くといふ事実も亦同断である。杉山氏は一行より五日早く出発して幾日か遅く帰るのであるがこれは氏一個のおもはくで我等とは関係のない事実である。ともあれ氏の活躍に敬意を表し健康を祝して置かう。

と、いささか興奮氣味に書いている。自分一人手柄を立てんとする杉山平助へのあてこすり、は痛烈であるが、ここにペン部隊参加者の複雑で微妙な心境が露呈していて興味深い。ちなみに、杉山平助は海軍班でただ一人最後まで

溯江艦隊に同乗して、ついに十月二十六日、漢口入城の一番乗り成功し、十一月十日帰国した。その様子はただちに『東京朝日新聞』に「漢口に入る」（昭13・10・30）の寄稿文となり、漢口攻略戦の従軍記集は『揚子江艦隊従軍記』（昭・13・12 第一出版社）にまとめられた。

海軍班が菊池寛や佐藤春夫の引用文からも推察されるとおり、相当厳しい軍の管理体制下に置かれていたのになんとして、陸軍班の方は比較的自由だったようだ。むろん、それだけ陸軍班の方が危険でもあったわけで、それ故、誰某は海軍を志望したなどという風評もたつたらしい。

陸軍班に所属した尾崎士郎の「ある従軍部隊」（『中央公論』昭14・2）には、

上海の軍報道部から渡された「従軍文芸家行動計画表」によると、九月二十二日から二十八日までが上海、蘇州、杭州の「戦跡及建設状態視察」といふことになつてゐる。軍の立場から言へば戦闘体形がやうやく整つたばかりのところへ彼等を送り届けるといふわけにもゆかなかつたらしい。——予定表から見ると彼等はあまり早く東京を発ちすぎてしまつたのだ。早く来すぎたことはおかれて来たよりもいいにきまつてゐるが、しかしそれがために戦場へ入る前の予備行動、言ひかへると戦跡の視察は到れり尽せりといふかたちになつた。

滝井孝作の「上海より蘇州まで」（『文芸春秋』昭13・11）や白井喬二の『従軍作家より国民へ捧ぐ』（昭13・11 平凡社）他を読むと、十七日に林芙美子が、十八日に深田久弥がまず一行に先だつて南京に行き、他の十二人は杭州、蘇州を経て二十二日に南京に着いた。ここで軍の報道部から従軍希望の方面と部隊が問われ、

片岡鉄兵と中谷孝雄とは郷土部隊に従軍志望にて、その部隊は大別山々脈の方面に在る由なり。陸軍班十四名のうちこの方面に只二人のみ向ふことはあまりにも淋しき故、ぼく（注・滝井）も大別山々脈の方向に同行を申出づ。そしてこの方面は三人ときまる。他の連中は、九江まで行き九江にて各々また方面をきめると云ふ。

ことになった。二十六日、大別山方面の三人と九江行きグループ九人とがそれぞれ南京を離れ、その後は各自思いの部隊についた。したがって帰国もまちまちで、川口松太郎は十月十二日、尾崎士郎は二十一日と早く帰り、漢口入城を果たした久米正雄や富沢有為男、若い中谷孝雄や深田久弥は十一月十二日に福岡へ帰還した。

ところで、海軍班の「殊勲甲」が杉山平助であったとすれば、陸軍班の「殊勲甲」は林芙美子において他にあるまい。彼女は陸軍班の一行とは終始、別行動をとって『朝日新聞』の支局長の自宅の一室を借り、自炊までする張りようだった。そのかいあって、彼女はペン部隊漢口一番乗りの殊勲をたてることができた。以下、「ペン部隊の『殊勲甲』／芙美子さん決死漢口入り」の三段抜きの『東京朝日新聞』（昭13・11・30）の記事である。

〔漢口にて渡辺特派員二十八日発。〕

ただ一人の日本女性として林芙美子女史が漢口に入城した。林さんは本社特派員一行に加はり去る十八日広済を出発、本社の無電トラックアジア号に乗り或は行軍を続け、快速部隊に従って決死の行軍を続けた。戦場に日本の女性が来たと、全軍将兵は夢でないかと驚いた。

林さんがあの荒涼たる武漢平原を行くのはそれこそ戦場の奇蹟である。林さんは忽ち戦の人氣の中心となつて林さんの勇敢さと謙讓さに全軍將兵心から尊敬し感激した。砂塵の中を、雨の中を行き夜露に濡れて露営し

て進んだ。自動車はいつ自雷に引つかかるか知れない、林さんも勿論決死の覚悟で従軍した。二十五日夜漢口北端大寨湖の堤防決潰でアジア号は渡れず、愈々漢口突入であるので記者（渡辺特派員）は林さんに後に残つて貰つた。林さんは一日遅れて入場したがそれでも陸のペン部隊一番乗りである。林さんの漢口入場は全日本女性の誇りである。

と喝采を得た林芙美子は、十月三十一日午後、大阪・木津川尻飛行場に帰ってきた。彼女の奮闘ぶりは、手紙形式の『戦線』（昭13・12 朝日新聞）と日記形式の「北岸部隊」〔『婦人公論』昭14・1、同月中央公論社刊〕に活写されている。「支那事変」開戦当初の吉屋信子に代つて、この時期の林芙美子の活躍は人びとの眼を見張らせた。

ペン部隊の成果

昭和十三年十二月の各雑誌は、どれを見てもペン部隊作家の従軍記や座談会が載つていて、従軍報告の花盛りである。十一月号にも現地から送られたであろう従軍通信や談話もいくらかあるが、やはり大方の作家は十月の半ば過ぎに帰っているため、十二月号になって一挙に掲載された。試みに主な雑誌の目次からペン部隊作家の従軍報告を拾つてみる。（座談会は除く）

富沢有為男	中支戦線	（『中央公論』）	片岡鉄兵	戦場を眼前にして（『改造』）
尾崎士郎	揚子江の秋	（ 〃 〃 ）	丹羽文雄	戦場覚書
丹羽文雄	還らぬ中隊（創作）	（ 〃 〃 ）	杉山平助	従軍おぼえ書

佐藤惣之助	戦火行へ詩	〔改造〕
尾崎士郎	戦影日記	〔日本評論〕
佐藤惣之助	敵前遡江へ詩	（ 〃 ）
岸田国士	従軍五十日へ連載	〔文芸春秋〕
吉川英治	漢口攻略従軍土産話	（ 〃 ）
北村小松	戦場	〔オール読物〕
浜本浩	遡江部隊	（ 〃 ）
尾崎士郎	第一線に立つ	〔日の出〕
吉屋・浜本・佐藤（惣）	従軍作家観戦記	（ 〃 ）
尾崎士郎	戦雲はるかに	〔雄弁〕
浜本浩	従軍作家と砲弾	（ 〃 ）
杉山平助	戦場より吾子に送る手紙	〔婦人公論〕
杉山平助	漢口遡江入城記	〔大陸〕

佐藤惣之助	南京展望	〔大陸〕
北村小松	戦場風談話	（ 〃 ）
佐藤春夫	戦線十日記	〔現地報告〕
佐藤春夫	開北三義里戦蹟	〔新潮〕
中谷孝雄	前線追及記―漢口攻略記	（ 〃 ）
丹羽文雄	上海の嵐	〔文芸〕
中谷孝雄	南京と廬州	（ 〃 ）
佐藤惣之助	中支の自然	〔若草〕
菊池寛	従軍の賜物	〔キング〕
吉屋信子	武穴上陸の日	〔新女苑〕
丹羽文雄	変化する街	（ 〃 ）
片岡鉄兵	従軍通信	〔婦人倶楽部〕
吉川英治	従軍感激譜	（ 〃 ）
浜本浩	戦場の花束	（ 〃 ）

しかし、新年号になるとほとんどの雑誌から従軍記は姿を消す。わずかに、

深田久弥	奥漢線遮断	(『改造』)	小島政二郎	従軍日記(連載)	(『三田文学』)
小島政二郎	漢口陥落の直前	(〃)	中谷孝雄	大別戦線従軍記	(『大陸』)
岸田・中谷・深田・山本実彦	「ペン部隊は何を見たか(座談会)」	(『文芸』)	林芙美子	北岸部隊	(『婦人公論』)
尾崎士郎	戦場の賞書	(〃)	石川達三	武漢作戦	(『中央公論』)
			立野信之	後方の土	(『改造』)

といった程度であり、二月号では、尾崎士郎の「ある従軍部隊」(前出)と井上友一郎の「従軍日記」(『文学者』)が目に着いたくらいだ。なお、石川達三、立野信之、井上友一郎はペン部隊の一員ではなく、石川は『中央公論』、立野は『改造』、井上は『都新聞』の特派員として漢口攻略戦に従軍した。

ペン部隊の出発まえは大騒ぎをし、従軍中も新聞には現地からの従軍通信が紙面を賑わせていたが、マスコミは彼らが帰国するや、待っていたようにして一度載せただけで、しだいに文学者の従軍記には見向きしなくなった。

むろん、だからといって文壇から従軍記や戦記が全く消えたわけでも、読者から見放されたのでもない。火野葦平の「麦と兵隊」が『改造』に発表された同じ昭和十三年八月号『中央公論』には、「陣中小説」と銘打った上田広の「鮑慶郷」が載っており、十二月号に「帰順」がある。上田は十一月号『大陸』にも「黄塵」を『文芸首都』から転載し、その後十四年四月号『改造』に「建設戦記——或る分隊長の手記」(続篇は十五年二月号)を、十五年一月号『中央公論』に「ほんぶ日記」と、戦記を書き続けた。

『中央公論』はまた、日比野士郎を十四年二月号「呉淞クリーク」で起用し、六月号にも「野戦病院」を書かせ、七月には同社から『呉淞クリーク』を出版するほど日比野の登用に力を入れた。ついでながら上田の『黄塵』も十

三年十一月に改造社から出ている。上田も日比野も火野と同様、「支那事変」に応召した陸軍伍長である。日比野は上海戦で負傷したためまもなく帰ったが、上田は十四年十二月の帰還まで戦地に居た。

要するに、文学者の戦跡めぐりの感傷的な紀行文や激情的な観戦記に代って、実戦者の生々しい臨場感のある戦闘記録や兵隊の実生活の記録・手記が登場し、戦記・従軍記の主流を成したのである。戦争が苛烈になり、戦局が進むにつれて、身のまわりの者が次から次へと戦場に送られていった状況を観察すれば、こうした傾向は人情のしからしむるところであり、自然の動向だったといえよう。だからこそ、火野・上田・日比野のように出征まえにながしかの文学体験があった者以外の作品でも、たとえば、谷口勝『征野千里』（昭13・12 新潮社）や中山正男『脇坂部隊』（昭14・1）などの実戦記録は多くの読者を得、陸軍大尉の肩書を持つ伊知地進までが『進撃』（昭14・2 改造社）他を著わすに至ったのであろう。そして、やがていわば素人の実録ものや軍人の手記・遺稿記が輩出したことは、高崎隆治の労作『戦争文学通信』（昭50・12 風媒社）所載の「戦争文学文献目録」を一瞥すれば瞭然とする。もはや、戦記・従軍記に関する限り、兵隊体験のない文学者の出る幕は、「大東亜戦争」で徴用されるまで訪れなかった。「文学者としての生涯に洋々たる未来を約束する如くみえ」て、意気揚々とペン部隊に参加した連中にとっては、見事に念願が裏切られてしまったのだ。

それはともかく、ペン部隊の作家たちは当然、かような風潮と世間の期待は熟知していたから、一部の者は危険な最前線へ行くことを志願したし、大部分の者は、

今度の従軍作家とか或は従軍記者とかを見よ。彼等は（その中に私もふくめて）帰国していちばん強調したがることは、自分がどれだけ危険を冒して来たかといふことである。或る作家たちは、自分たちがたしかに第一

線に出たことに相違ないといふ証明書を、司令官からもらつて来たものもあるといふことだ。自分の冒した危険が出来るだけ大きなものとして人から考えられ、また自分でさう思ひこみたがるものである。

(杉山平助「従軍おぼえ書」前出)

という事實はあった。それがため一方では、杉山平助や林芙美子のように単独行動に終始し、漢口入城に成功した者への風当りが強かったり、微妙な心理的摩擦や波紋がペン部隊の作家団のなかで生じたことはすでに述べた。

しかし、杉山や林がどんなに決死の覚悟で臨んだと力説し、いかに危険に遭遇したかを強調したところで、所詮、彼らは観戦者であつて兵隊ではない。彼らはいざとなれば戦場を離れることもできたし、危険を避けることもできた。ところが、実際の兵隊はどんなに弱音をはき、戦闘から逃れたいと思つても、それは許されない。万一逃亡でもすれば味方に銃殺される。そこが観戦者と実戦者のちがうところだ。いみじくも北原武夫が火野葦平を論じた「戦争文学論」(『文学と倫理』昭15・11 中央公論社)で指摘した「戦争の中にあるものと戦争の外にあるものとの差」(傍点原文)は、戦場のように人の生命をかけた場所では大きく、かつ歴然としている。

とすれば、いまや身内が「戦争の中にある」多くの銃後の国民が、「戦争の外にあるもの」の戦記に関心を示さず、共感を覚えなかったとしてもやむをえない。ちなみに、『昭和戦争文学全集・2』(昭34・9 集英社)の解説を書いている大岡昇平によれば、「殊勲甲」と新聞で評判になった林芙美子の『北岸部隊』(前出)は、「それまでの戦記ものの発行部数から見ても、初版五万を刷ったが、ほとんど全部が返って来た。」そうである。もっとも、大岡は「国民の間に厭戦気分が漲りはじめた徴候であつた。」と続けるが戦記の発行点数はむしろ増えているので、そうとばかりはいえないだろう。

さて、最後に、ペン部隊そのものを素材にした尾崎士郎の異色な小説「ある従軍部隊」（前出）についてふれておこう。この作品は発表当時は後述のように中村武羅夫から酷評され、尾崎との間に応酬があり、戦後は逆に高く評価された。平野謙・大岡昇平・安岡章太郎・開高健・江藤淳が編者となって刊行された『戦争文学全集』全六卷（別巻一）（昭46・12―47・6 毎日新聞社）は、第二卷を「昭和戦前・戦中編」としているが、「ある従軍部隊」はこの巻に収録された、「生きてゐる兵隊」や「麦と兵隊」と並んで八編の一つに数えられて採用されている。

小説は「九月二十三日の午後、内閣情報部の会議室には、十人あまりの情報官と、陸、海両省から派遣された三四人の将校が、その日招かれた十一人の文芸家とほそ長いテーブルを挟んで向ひあつてゐた。おかれて入つてきた小説家の野方作兵衛が物珍らしさうに……」と、内閣情報部に招かれて懇談したときから始まり、最前線に至る直前、九江到着までの尾崎が属した陸軍班の様子を細かく描いている。といっても、ここには勇ましい武勇伝や激しい戦闘場面の描写はほとんどない。戦場風景の描写も少ない。白井喬二ばりの『従軍作家より国民へ捧ぐ』（前出）調のものでもない。

作者の眼はもっぱら軍部に選ばれて戦地に赴く従軍作家たちが綾なす人間模様と自らを見つめる。大名旅行と批判されたことへの気がね、人選をめぐる噂への思惑、手柄を立てたいとする功名心とそれへの反発、漢口陥落まえに帰ることの世間の非難への恐れ……といった従軍作家たちと自己のさまざまな内面がえぐり出される。あるいはまた、老大家が大金を盗まれ、それを同行の弟子筋の者が用だてる話、戦地に来てまで酒と女を求めている詩人の話、「おれにはあいつのことがどうしても気に喰はんのや」といってけんかを始める類の話も頻出する。たしかに中村武羅夫が言うとおりの従軍部隊の「楽屋落ち」だ。左記は『東京日日新聞』（昭14・2・1）の「文芸時評」である。

「ある従軍部隊」はいつたい作者の如何なる意図を以て描かれたものであるか。かくのごとき現実——人間の動きを出すことによつて、何を読者に示さうとしたものであるか。かういふ題材を、こんなにも長々と書き並べることによつて、いつたい如何なる人生の意義を語らうとしてゐるのであるか。抑々作者は、どういふ意味を感じて、この事実を、これだけに書きつづけることが出来たのであらうか。ただ、現象の上ツラだけを見て、作者の浅薄な楽屋落的な興味だけで書いたといふに過ぎない作品ではないか。

作者が如何なる点に性根を据ゑて、この題材を覷たり、考へたりしてゐるのか。——さういふ文学者として、筆を執るに當つて必ず持たなければならぬ筈の誠実を、この作者はみぢんも持つてゐないのである。苟しくも作家である以上は、たとひ通俗小説を書く場合にだつて、不誠意、無批判に、のらりくらりと百五十枚の作品を書いてのけるといふことはないだらう。

複雑で、錯綜した事象の中から、よくもこれだけ上手に纏めたとか、「ちよつと面白いではないか」などと褒める人が、ほかにあるかも知れない。が、僕は、もつと根本の、この作者が、この作品と取組んでゐる心構えを非難してゐるのだ。……(略)

中村の非難はさらに続き、「かくのごとき作品にたいする文学上の価値は、厳正に批判されなければいけないと思ふ。」で結ばれる。ペン部隊の第二陣に参加するにあたって、山梨県の山中で鍛練して従軍に備え、「大東亜戦争」下ではみそぎまで行なつた中村武羅夫から見れば、勅選にも匹敵する情報部派遣従軍作家に選ばながら、尾崎の姿勢と心構えはがまんならなかつたにちがいない。

ところが、これが戦後になると、「ペン部隊の人びと」(『ペンと戦争』昭51・12 成甲書房所収)で高崎隆治の

評価は次のようになる。

『ある従軍部隊』の中で表白される尾崎士郎の苦悩は、軍部というしたたかな大詐欺師にしてやられたことの悔恨と、はたして無縁のものであったろうか。戦場にあつてつねにみずからの内側をのぞきこもうとする尾崎が、とどのつまりはいっさいを肯定的に受けとめることで忠誠的立場を固めたにしろ、精神の軌跡の揺れ幅は痛ましいほどに歴然としている。

「不承無承に次から次へと変つてゆく環境に妥協しないではいられない卑屈な根性の方へ引かれて行くことに腹が立ってきた」と彼が言う時、まさしくその「卑屈な根性」は「彼等を待遇する軍の態度」が「あまりに懇切を極めすぎている」からであり、「何時の間にか低い責任観念に囚はれて大きい目的を見失つてしまふ。言つてみれば何の判断も抱負もなしにずると追ひ立てられてゆくうちに、戦場のお客様という誹謗の中にちつと腰を屈めてゐなければならなくなる」自分が、尾崎自身を「苛立たせるのである」。

おそらく、戦場で、尾崎ほどにペン部隊に加わつたことを後悔した者はなかつたろう。全面戦争開始の時点で、雑誌特派員として単独で華北の戦場を歩き、いち早く『悲風千里』を書いた尾崎は、題名が示唆するように、戦火によつてすべてを奪われた中国民衆の悲惨に心を痛め、運命的なものとして戦争を肯定しながらも、彼のヒューマンな視線はたえず中国人の上に注がれていた。少くともそこでの彼は「戦場のお客様」ではなかつたが、もともと、時代がかった義理人情を身上とする尾崎であつてみれば、その相克のなかで宙づりされた心情が無残に引裂かれるのは当然であつた。

尾崎の「選ばれて徴用に任じ誤つて青春に伍す」(「人生劇場」遠征篇)のことばが思い起される。

それにしても、いったいペン部隊はどのような成果を生み、誰に寄与するところがあったのだろうか。文学的側面から見れば、従軍作家が従軍体験を直接小説化したのは、そのできばえはともあれ、丹羽文雄の「還らぬ中隊」と尾崎士郎の「ある従軍部隊」しかないといってもよい。井上友一郎「従軍作家の問題」(『日本評論』昭14・1)からの引用であるが、上海の軍報部で従軍文士に渡された「従軍文芸家行動表」に示された「目的——主トシテ武漢攻略戦ニ於ケル陸軍部隊將兵ノ勇戦奮闘及ビ労苦ノ実相ヲ国民一般ニ報道スルト共ニ占領地内建設ノ状況ヲ報ゼシメ以テ国民ノ奮起ヲ促シ対支問題ノ根本解決ニ資スルモノトス」という面での成果も、従軍記がマスコミに載らなかった状況ではあまり得られるはずはなからう。作家個人の「文学者としての生涯に洋々たる未来」は、再三述べたごとくかなえられなかった。強いて成果をあげれば、前引の杉山平助が紹介した「天下の全耳目を漢口に集中せしめ」たことであろう。たしかに、漢口攻略戦が発令された昭和十三年八月二十二日以後十月二十六日の占領までは、マスコミは従軍作家に関する報道を欠かさなかったからである。